

抑<sup>そもそも</sup>法華經<sup>だいびやくごしゃ</sup>の大白牛車と申すは、我も人も法華經の行者の乗るべき車にて候なり。  
彼の車をば法華經の譬喩品と申すに懇<sup>ねんご</sup>ろに説かせ給ひて候。但し彼の御經<sup>らじゅうぞん</sup>は羅什、存  
略<sup>りやく</sup>の故に委<sup>くわ</sup>しくは説き給はず。天竺の梵品には車の莊<sup>かざ</sup>り物、其の外、聞・信・戒・定  
・進・捨・慚<sup>ざん</sup>の七宝<sup>しっぽう</sup>まで委<sup>くわ</sup>しく説き給ひて候を、日蓮あらあら披見に及び候。先づ此の  
車と申すは縦広五百由旬の車にして、金<sup>こがね</sup>の輪<sup>りん</sup>を入れ、銀<sup>しろがね</sup>の棟<sup>むね</sup>をあげ、金の繩を以て  
八方へつり繩をつけ、三十七重のきだはしをば銀を以てみがきたて、八万四千の宝の鈴  
を車の四面に懸けられたり。三百六十ながれの<sup>紅</sup>くれなひの錦<sup>はた</sup>の旛<sup>ぼん</sup>を玉のさほにかけなが  
し、四万二千の欄干<sup>らんかん</sup>には四天王の番をつけ、又車の内には六万九千三百八十余体の仏菩  
薩宝蓮華に坐し給へり。帝釈は諸の眷属を引きつれ給ひて千二百の音楽を奏し、梵王は  
天蓋<sup>てんがい</sup>を指し懸け、地神は山河大地を平等に成し給ふ。故に法性<sup>ほっしょう</sup>の空に自在にとびゆく  
車をこそ大白牛車とは申すなれ。我より後に来たり給はん人々は、此の車にめされて靈  
山へ御出で有るべく候。日蓮も同じ車に乗りて御迎ひにまかり向かふべく候。南無妙法  
蓮華經、南無妙法蓮華經。

日 蓮 花 押